

祢軍墓誌銘の「日本」と白村江戦前後（再考）

小林 敏 男（大東文化大学名誉教授）

A study on the word Japan in the epitaph for De Gun (reconsideration)

Toshio KOBAYASHI

はじめに

本稿は先に同名の題で発表した論文^①の再考である。先の論文は二〇一六年三月発表（刊行）であるが、事情があつて二〇一三年十月成稿のものである。そのため重要な最近の研究動向をふまえていない。そこで改めて先の拙稿を再考、補強しておきたい。

祢軍墓誌銘は、たいへん難解なものであつて、そこから史実を復元するのは容易なことでない。したがつて、前稿では、祢軍の『日本書紀』（以下書紀とする）や『三国史記』にみえる事蹟を前提にして銘文を読みこんだ。それは、墓誌銘の文章自体の内在的な検討を通したものでない、不十分さは残るものと思つている。

銘文自体の注釈は、古代東アジア史ゼミナール^②（早稲田大学）をはじめ、個別的には、東野治之^③、葛継勇^④、井上亘^⑤らによつて進展してきているが、まだ十全なものとはなっていない。

この墓誌銘文中の論点は、「日本餘嚙」の「日本」をどう理解するかである。

この墓誌銘がとりあげられたのは、二〇一一年七月、中国史家王連龍^⑥によつて公表されたものであるが、ここでは日本という国号の初見であるとして話題をよんだ。しかし、東野治之^⑦は、この銘文には国号にかかわる国名は一切登場しておらず、「日本」を国号とみるのは早計であるこ

と、「日本」は暗に滅ぼされた百済を寓意しており、その余燠（残党）の活動をのべたものであるとした。この東野見解によって、近年の研究動向は「日本」を国号とみる見解は少なくなつた。

問題は、銘文にみえる日本、扶桑、風谷、盤桃、海左、瀛東はどの国、どの地域を寓意した表現なのかであるが、これが中国の古典籍に精通していないものにとつてはなかなかむずかしい。

筆者は、前論文で、「日本」を百済在住の倭人系集団・倭系百済官僚、すなわち倭人・倭国の別称とみて、「扶桑」を本国の倭国をさすものとみた。また「風谷」を百済、盤桃を耽羅、海左を新羅、瀛東を倭国をさすものとみた。これは、拙著『日本国号の歴史』^⑧で展開したのであるが、「日本」号の始源は中国で、それが倭国をさす別称・異称として成立したのは朝鮮半島の百济国であり、百済の史たちが日本を倭人・倭国をさす別称として史書などに表記した。それが百済の史たちの渡来によって我が国にもちこまれて、天智朝頃にはこの別称が流行した。そして天武朝の『日本書紀』の編纂を契機に飛鳥浄御原令で国号として定着したと結論づけた。

いわば、天智朝を中心として、対外関係においても、倭・倭国を好字の日本で表記することが一種の流行をみせた。その「日本」の別称の出発点は百済であつたことをとくに百済三書の一つといわれる『日本書紀』(『日本書紀』所引)の中の「任那日本府」「日本天皇」「日本使人」という表記から考えた。即ち、「日本」という表記は、旧加耶・在百済の倭人系集団をさす別称として始まつたのであり、それを表記したのは、推古朝期を下る『百済本記』の編纂に関わつた史達であつた。したがつて、今回の祢軍墓誌銘の「日本」を百済を寓意しているとみる見解は疑問であり、在百済を中心とした倭人、倭の別称だと考えられる。前稿では、倭人・倭国の別称としたが、正確には、倭人、倭の別称とするのがよいだろう。墓誌銘では、祢軍は倭国との関係の中で登場してくる。

公(祢軍)海左に格謨(謀りごと)し、瀛東に龜鏡(手本)たるを以つて、特に帝に簡(えら)はるるに在て、往(ゆ)きて招慰(懐柔)を尸(つか)る。
 公臣節(臣下としての節義)に侷(か)いて命を投じ、皇華(皇帝の使者たる栄光)を歌い、以つて載(す)ち馳(は)す。汎海(大海)を飛ぶ蒼鷹、凌山(峻山)を翥(と)る(飛)ぶ赤雀は、河(大)きな皆を決(き)裂(き)きて天呉(海神)静まり、風隧(風のトンネル)を鑿(う)ちて雲路(海路)通ず。驚く鳧(水鳥)は侶(伴侶)を失い、済(わた)るに夕を終えず。遂に能く天威(皇帝の權威)を説き暢(の)べ、噓(う)すに禍福千秋(半島での利害関係)を以つてす。僭帝(倭帝)は一旦臣と称して、仍(よ)りて大首望(数十人)を領(ひ)いて、將(まさ)に入りて朝謁(ちやうえつ)す。特に恩詔(めぐみ)を蒙(こう)りて、左戎衛(正五品上)郎將を授く。

右の解釈は、「蒼鷹」と「赤雀」を戦艦の名とする東野治之^⑨、「天呉」を海神とする気賀沢保規^⑩によつてゐる。

祢軍の外交官としての活躍は、二度にわたる倭国(ヤマト)への来使と、司馬としての新羅への工作活動が『書紀』と『三国史記』にみえるが、右の海路による遣使の様子による限り、また左戎衛郎將を授かつた年次からみても、新羅への派遣ではなく、倭国への遣使としての活躍をのべた

ものであることが知れる。勿論、そのことは「日本」を倭・倭人の別称とすることを直接意味はしないのであるが、少なくともこの墓誌銘文が倭国とは無縁のものであり、倭—倭国を副次的なものとして位置づけようとする見解への批判となる。

なお、前稿では祿軍の外交官としての事蹟から「海左」を新羅、「瀛東」を倭国に比定したのであるが、墓誌銘の性格からいって、これは具体的な国名を意味するものでなく、中国側からみた倭国までもふくめて朝鮮半島全般をさす地域として考えた方がよいであろう。

以下では、「日本の余嚙」と祿軍の倭国への遣使の二点に論点をしぼり、改めてこれを唐—朝鮮半島—倭国の東アジアの国際関係—とくに白村江戦前後の——の中で考えてみたいと思う。

1 「日本の余嚙」の解釈を中心に

1

銘文における関連箇所を左に示す。

去る顕慶五（六六〇）年、官軍（唐）本藩（百濟）を平ぐる日、機を見て変を識り、劍を杖して帰するを知る。由余の戎を出づるに似て、金碑の漢に入るが如し。聖上（唐の高宗）嘉び歎じて、擢するに榮班と以ってし、右武衛滌川府折衝都尉（正五品下）を授く。時に日本の余嚙は、扶桑に抛りて以って誅を遁れ、風谷の遺趾は盤桃を負いて阻み固む。万騎野に亘り、蓋馬とともに以って塵を驚かし、千艘は波を横り、原虵を援きて縦び瀾つ。

このあと、先にみた公（祿軍）の倭国への派遣の銘文がつづく。

さて、右の銘文はどのように理解したらよいか。

顕慶五（六六〇）年は、唐・新羅連合による百濟の平定があり、この時祿軍は臨機応変に劍をおさめて帰順した。それは春秋晋の人で西戎に入つて戎王に仕え、さらに戎をでて秦王に仕えた由余の奔走に似ており、また匈奴人であつて、漢に逃げこんで武帝に仕えた金日磾の如き人であつた。高宗はよろこんで特に名誉ある地位に抜擢して右武衛滌川府折衝都尉に任じた。

このあと、問題の「干レ時・日本餘嚙、據扶桑一以通レ誅、風谷遺趾、負盤桃一而阻固」とつづく。「干レ時」の時、六六〇年の百濟の滅亡とされる時から以降の朝鮮半島の不穏な情勢をのべたものである。

「日本の余暉」と「風谷の遺配」は対句であり、余暉も遺配も戦いで生きのこったもの（残党）の意味であるから、どちらも半島での戦いの結果、唐にやぶれた遺臣・兵士たちが生き残って抵抗している様子が記されている。この場合、^①日本の余暉は扶桑を拠り所として誅からのがれようとしており、^②風谷の遺配は、盤桃を背にして阻止しようとしている。

^①は、百済内で敗れた倭人集団で彼らは扶桑の国である本国のヤマト（倭国）によって誅殺をのがれようとしており、^②は百済の遺臣・兵士たちは盤桃の生育する耽羅国（済州島）を最後の拠り所として抵抗している。

^③の「日本」を前稿では主として百済国内にいた倭人系集団、倭系百済官僚ということで強調しすぎた嫌があるが、これは六六〇年の唐・新羅連合を百済との戦いに百済内にいた倭系集団や倭系百済官僚が百済側に立つて活躍することがあったからではないかと推測したからである。

朝鮮半島南部の旧加耶（加羅）を中心とした倭人系集団や欽明朝頃から顕著にあらわれる倭系百済官僚の存在、そして『唐書』百済伝に人種構成として百済人のなかに新羅・高麗・倭人らが雑ざっていると記述などをみると、明治時代以後よくいわれていた天智朝の白村江戦後、はじめて朝鮮半島南部と日本列島との明確な境界区分がなされたとの指摘はやはり考慮に入れなければならないと考える。それは具体的には、白村江戦後の六六五（麟徳二年、天智天皇四年）年八月の就利山（熊津）における熊津都督府の扶余隆と新羅王法敏（文武王）との会盟に、倭人が耽羅の使人とともに参列していたとの指摘がある^④。そしてこの会盟のあと帶方州刺史劉仁軌に従って新羅・百済・耽羅・倭人の四国の使人が、翌年正月の高宗の泰山での封禪の儀式に望むべく出発したという（『冊府元龜』卷九八一、外臣部、『旧唐書』劉仁軌伝、『三国史記』新羅文武王五年八月条）。後述するようにこの時の会盟の倭人は倭国（ヤマト）からの正式の使者ではなく、唐の羈縻州支配下にあった旧百済の熊津都督府の働きかけによるものであって、それは百済内にいた倭系百済官僚・倭人系集団の参加であつたらう。

『旧唐書』劉仁軌伝によると、水軍と糧船を率いて熊津から白村にむかった仁軌は、「仁軌遇倭兵於白村之口、四戰捷。焚其舟四百艘、煙焰漲天、海水皆赤、賊衆大潰。余豊脱身而走、護其宝劍。偽王子扶余忠勝・忠志等率士女及倭衆并耽羅国使、一時竝降、百済諸城皆復帰順」と白村江の戦いの様子を伝えている。この場合、倭国（ヤマト）の將軍らの指揮下にあつた本国からきた倭兵と、百済の王子忠勝・忠志らに引きいられていた倭衆とは区別したい。倭衆とは在百済の倭人系集団、倭系百済官僚であつたと考えられる。

ただ、前稿では、在百済の倭人系集団、倭系百済官僚の存在を強調しすぎたが、「日本の余暉」という時、白村江戦での倭国からの軍兵の残党の存在もそこに入れて考えた方がよいかもれない。ただ、「日本」という表記がでてくる背景として百済に在る倭人系集団・倭系百済官僚の存在が認識の前提となっていないか。

次に扶桑は、日本と対応関係にある。扶桑は両樹両根の祥瑞のある神木であつて、中国からは海上はるか東の太陽の出る神秘の地で生育する神木である。墓誌銘に登場する扶桑は第一義的に国名を意味するものでなく、倭国（ヤマト）の別称というより、倭国を寓意しているとみる方がよ

い、墓誌銘の扶桑は、次の盤桃と同じでここでは残党の抵抗の拠り所として、両樹両根の巨大な神木であることが第一義で、それが倭国(ヤマト)を寓意しているということである。

2

次の「風谷の遺叱」は高句麗をさすとする見解も強い。その場合、遺叱は残党を意味する高句麗戦が前提として想定されなければならない。この点については、六六八年の高句麗の滅亡後であれば、「風谷の遺叱」も「日本の余嘸」との対照で意味をもつが、墓誌銘のこの箇所は六六四年の祿軍の倭国(ヤマト)遣使より前のことをのべていることから、高句麗をここにもつてくるのは「遺叱」の語句からみて疑問である。この点、井上巨¹²は、「風谷の遺叱」を高句麗の遺臣とみる立場から、六六一年八月にみる唐軍の平壤城に迫った湟江の戦いやその翌月の高句麗の精兵数万を大破した鴨緑水の戦い、あるいは翌年二月に唐が大敗を喫した蛇水の戦いなどが念頭にあっての表現でないかとしている。そして、「遺叱」を異民族の卑称に近い用法とみる。確かにそれは一つの解答になるかもしれないが、やはりこの戦いは基本は、高句麗が唐を撃退した戦いであったから「風谷の遺叱」にはなじまないと思う。

次の蟠桃もそれを百済、高句麗、新羅、あるいは倭とみる見解があつて一定していない。

これはある意味ではやむを得ないところがあつて、日本も扶桑も風谷も蟠桃もみな中国からみた場合、海上はるか彼方の東方の神秘の地、未開の地を指すのであつて、それが墓誌銘ではどの地域あるいは国がそこに寓意されているかということであろう。

筆者は、「風谷」を「日本」との対応上、百済を寓意しているとみたので、「蟠桃」は、耽羅(済州島)とみた。耽羅は朝鮮半島の国々とは違つて、海南的文化をもつ地である。蟠桃もまた扶桑と同じく、一義的にはその木はのちの疫神信仰(追儺)に関係するので、東海の度朔山という山にある曲りくねった三千里にわたつてのびている呪木である。百済にとつて耽羅国は五世紀後半頃から、従属関係にあつたが、白村江前後の戦役では百済側に立つて参戦しており、先の就利山での会盟にも倭人とともに参加し、泰山の封禪の儀にも参列している。この耽羅国は倭国(ヤマト)とも友好関係にあり、斉明天皇七年五月に始めて朝貢したことがみえ、その後天智朝に二回、天武朝に三回、持統朝に二回遣使したことがみえる。「百済救援の橋頭堡として戦略的な価値をもつ」¹³国である。

このあと、「◎萬騎野に亘り、蓋馬とともに以つて塵を驚し、④千艘は波を横り、原蛇を援きて縦ひ満つ」と続く。◎陸上では騎馬集団が野を走り回り、馬胄をつけた騎馬が砂塵をまきおこした。④海上では、千艘の船が波を横切っている様は、まるで海蛇がうかんで海面に満ちている様子と似ていた。これは、(a)(b)を受けての結果を示すものであろう。即ち時系列的にいえば、(c)(d)は、(a)(b)のあとの白村江(六六三年)前後の出来事

を記したものであろう。③は、高句麗の騎馬軍団のイメージが浮かぶが、百済や唐や新羅の騎馬軍団でもよいわけである。現に百済国内では白村江以後も百済の残党が任存城で抵抗していて、新羅はこれを打倒できない状態にあった（『三国史記』文武王三年五月〜十月条）。また六六四（文武王四年）年三月に百済の残党が泗比山城によって反乱を起こし、熊津都督が出兵してこれを鎮圧したとある（『三国史記』文武王四年三月条）。いわば、祢軍が倭国（ヤマト）に派遣される六六四年五月でも朝鮮半島は不穏な状況が続いていたわけである。祢軍は、こうした白村江戦後の混乱を收拾するべく、唐の最大の課題である高句麗征討の成就にむけて倭国に派遣されるのである。

2 祢軍の倭国派遣をめぐる

1

禰軍の倭国（ヤマト）派遣は『書紀』にも記されているが、それは墓誌銘の公（祢軍）の遣使部分と対応している。しかし、この点に関して、『書紀』の禰軍派遣と墓誌銘とは一致しないという葛継勇の論文^④もだされている。そこで本章では、その点を念頭においた上で、禰軍の倭国派遣について考えてみたい。

『書紀』天智天皇三（六六四）年五月十七条日に「百済鎮將劉仁願、朝散大夫郭務悰を遣して表函と献物を進る」とある。そして冬十月条に「乙亥の朔に、郭務悰等を発遣す勅を宣りたまふ。是の日に中臣内臣、沙門智祥を遣して、物を郭務悰に賜ふ。戊寅に、郭務悰等に饗賜ふ」とある。最後に十二月十二日条に「郭務悰等、罷り帰りぬ」とある。『書紀』には禰（祢）軍の名は現われてこないが、『海外国記』（『善隣国宝記』^⑤）、天智天皇三年の条）にはみえる。

『海外国記』に曰く、天智天皇三年四月、大唐の客来朝す。大使朝散大夫上柱国郭務悰等卅人、百済の佐平禰軍等百余人、对馬島に到る。大山中采女通信侶・僧智弁等を遣わして来らしめ、客を別館に喚ぶ。是において、智弁問いて曰く、表書并びに献物有りや、以って否やと。使人答えて曰く、將軍の牒書一函并びに献物有りと。乃ち牒書一函を智弁等に授けて奏上す。但し献物は檢看して將らず。九月、大山中津守連吉祥・大乙中伊岐史博徳・僧智弁等、筑紫大宰の辞と称し、実は是れ勅旨なり。客等に告ぐ。今客等の来状を見れば、是れは天子の使人に非ず、百済鎮將の私使なり、亦復齋す所の文牒は、執事に送上する私辞なり。是を以って、使人は国に入ることを得ず、書も亦朝廷に上らず。故に客等の自事は、略言辞を以て奏上するのみ。十二月、博徳、客等に牒書一函を授く。函の上に鎮西將軍と著す。日本鎮西大將軍、百済国に在

る大・唐・行・軍・総・管に牒す。使人朝散大夫郭務悰等至る。来牒を披覽し、意趣を尋ね省るに、既に天子の使に非ず。又天子の書無し。唯是れ総管の使、乃ち執事の牒たり。牒は是れ私意なれば、唯須く口奏すべし、人は公使に非ざれば、入京せしめず、云々。

「海外国記」は、『本朝書籍目録』に「海外国記四十卷、天平五年、春文撰」とみえるから、天智朝の記録類を集成した確かなものと考えられる。「海外国記」では、禰軍(禰)は百済佐平の肩書きとなっており、彼は六六〇(顕慶五)年の百済滅亡の際に帰順して高宗から右武衛濠川府折衝都尉(正五品下)に任ぜられており、しかも翌年(二回目)の来朝では、右戎衛郎将(從四品)上柱国百済禰軍という肩書き(『書紀』天智天皇四年九月条)であったから第一回目の肩書きも唐の位階をもっていたはずであり、推測になるが右戎衛郎将であった可能性はある。そして第一回目の外交等の功によって上柱国という勲位(正二品)の名譽も与えられたのであろう。「海外国記」に一回目の禰軍(禰)の肩書き百済佐平とあるのはもともと禰軍は父祖以来、百済官位制の最高位にあった名家の出身であり、その位階は百済と長い友好関係にあった我が国でも十分認識されており、そうした伝統的な肩書きを外交交渉上特に強調したものであろう。百人の人達を引率してきたという点も見落せない。重要な任務をもつての遣使であつたらう。

この一回目(天智三年、六六四年)の派遣は、唐の出先の百済の鎮将であつた劉仁願の判断によるものであつて、本国の皇帝の使者でなかつた。「海外国記」は百済鎮將の私使としており、將軍の牒書もたらされた。牒とは統属関係にない対等の官司相互間の伝達文書であつた。したがつて、郭務悰・禰(禰)軍は入京をゆるされなかつた。そして、伊岐史博徳を通して、ヤマト(倭国)の牒書が郭務悰に授けられる。そこには、「日本鎮西筑紫大將軍、牒下在百済国大唐行軍總管上」とあつた。

右の「鎮西筑紫大將軍」の称号については、唐の將軍にあわせた造作という見方(6)もあるが、これは『書紀』にはなく、「海外国記」に所収されていたもので、筑紫大宰府の記録類にあつたものかもしれないが、本来は「伊吉(岐)連博徳書」にあつたものではなからうか。これは外交文書としての牒書の宛名として冒頭に書かれていたもので、その牒書を授けた伊吉博徳の手によるものではないか。伊吉博徳は渡来系官人で外交官としてまた文筆家としてもすぐれて才能をもっていたが、齊明天皇五(六五九)年遣唐使の一員として派遣され、丁度唐の百済討滅の時期にあつており、唐で抑留された経験をもつ。その時の手記が「伊吉連博徳書」として『書紀』に引用されている。この他、天智六(六六七)年十一月には、百済の鎮將劉仁願の派遣した司馬法聰を百済に送る使となつてゐる。さらに持統天皇九(六九五)年には遣新羅使となつており、大宝律令の撰修にも参加している(7)。おそらく「伊吉連博徳書」に記載されていたものが「海外国記」に掲載されたものではないだろうか。造作説も考えられるが、牒書を造作する必要はないと思う。

この「日本鎮西筑紫大將軍」という称号は『書紀』にはみえないものであるから、その性格をめぐっては議論が必要である。「鎮西」について

は、天平十四（七四二）年大宰府が廃止され、翌年十二月に鎮西府がおかれ、將軍以下の任命がなされた。そして、七四五年に廃止されていた大宰府が復置された。これは天平十二（七四〇）年の大宰少貳藤原広嗣の乱が設置の原因とされており、非常時における大宰府の軍政化と考えられる。「海外国記」は、天平五年の撰であるからこの天平期の鎮西府の影響をうけた表現（作文）ではなく、実際に百濟救援による国家非常事態（臨戦体制）の將軍号であつたらう。

この將軍号と関係のありそうなのは、「筑紫都督府」である。「書紀」天智天皇六（六六七）年十一月条に「百濟鎮將劉仁願、熊津都督府熊山県令上柱国司馬法聰等を遣して大山下境部連石積等を筑紫都督府に送れり」とでてくる。これは、筑紫大宰府の唐制になつた文節^⑧、あるいは造作^⑨とみる見解もつよいが、一方その実体をもとめる見解もつよい。

『書紀』の天智天皇の巻は、壬申の乱での資料の散逸や編年の混乱もあつて問題点もある（重複記事、表現上の問題）。したがって、確実なことはいえないにしても、「筑紫都督府」という機関が軍事的な側面をもっていることはこの時期にあつている。

白村江戦役の時、中大兄皇子（のちの天智天皇）は、朝倉宮での母斉明天皇の崩御（六六一年七月）後、皇太子の身分のままに執政^{しつせい}し、那ノ津の長瀬宮（旧磐瀬宮）に遷つて「水表之軍政」（対朝鮮出兵の軍政、『書紀』天智天皇即位前紀・家傳 鎌足伝）に着手したとある。この時に、中大兄体制の下で臨時に「筑紫都督府―鎮西筑紫大將軍」の軍政が立ちあがつたと考えてみてもよいのではないか。この場合、「鎮西筑紫大將軍」とは中大兄の弟の大海人皇子ではなかつたか^⑩。大海人皇子は「大皇弟」（オホスメイロド）とも称しており、「皇弟」（スメイロド）はふるくは穴穂部皇子の称としてもみえる（用明紀二年四月に皇弟皇子とある）ように、大兄と同じよう輔政者としての地位を示す呼称であつた^⑪。大海人皇子はヒツギノミコ（皇太子）ではなく、中大兄の下で輔政の地位（スメイロド）に就いていたのである。

中大兄は、六六一年十一月の飛鳥川原での母の殯の儀式が行われている時には帰国していたと考えられるから、百濟王子豊璋に緘冠を授け本国に衛送する手筈を整え（九月）た後、飛鳥へ戻つたのではないか。その後は、筑紫では大海人皇子が「鎮西筑紫大將軍」として「水表之軍政」を代行したのではないか。大海人皇子については、我が子大津皇子（母は天智の娘の太田皇女）の出生（筑紫の娜^なの大津で生まれた）からみて、白村江の戦いの六六三年の時点には筑紫にいたと推定される。

「筑紫都督府」は、天智紀にただ一例みえるだけであるが、白村江の臨戦体制のことを考えるとき、これを造作・作文と考えるよりは、天智天皇紀（巻）の性格からみて原資料が顔をのぞかせたとみるべきではないか。勿論、この「筑紫都督府―鎮西筑紫大將軍」は、臨戦体制下の一時的な機関の称号とみるべきで、その後、平常時の筑紫大宰府への転換に舵を切つたのであろう。

筑紫大宰府の初見は、『書紀』天智天皇十（六七二）年十一月であるが、それより以前には筑紫大宰・筑紫大宰帥^{かみ}、筑紫帥^{かみ}（率）などとみえる。これは府という機関化の前の表現で、大宰は、オホミコトモチと訓ぜられている。それは、筑紫における外国の使者に対して、大王（天皇）の詔

勅(ミコト)をもって対応する官人を意味しており、その対応・応待する場として那津官家(ミヤケ)があった。そうした平常の体制が白村江の臨戦体制化で軍事的な「筑紫都督府」と機能をもった軍政的な機関が一時成立したのではないか。いわば筑紫大宰府の前身的機関として位置づけられよう。(但し、筑紫大宰府の成立が『書紀』にみえる天智十年であったかどうかは改めて検討してみる必要性はある。浄御原令にさざると説もある)。

そこでもう一つの問題となるのは牒書にみる「日本・鎮西筑紫大將軍」の「日本」である。この牒書はすでにみたように伊吉博徳が実際の責任者として作成したものであろうから、「日本」を冠しているのは気になる。牒書では相手側は「在百済国・大唐行軍総管」と国名が記されており、それに対応して「日本」を冠するのは自然である。ただ、それが倭国でなく「日本」であるのは不信をいだくかもしれない。博徳が『伊吉連博徳書』におさめるにあたって、倭国にかえて日本に変更したということも考えうる。一方、この時期、とくに我が国を百済との関係で外交文書において、倭国にかえて別称としての「日本」を好字として使用することが一般的であったかもしれない。あるいは国内的には、「日本」の好字として倭でなく日本を使用することが一般的であったかもしれない。百済側でも倭、ヤマトの別称としての「日本」が共通認識となっていたとすれば、「日本」という呼称を冠することはありえたとも思われる。筆者は、すでに『日本国号の歴史』でも指摘したように、天智朝頃には倭、倭国の別称・異称として「日本」の文字を使用することは流行していたから、百済側の史官が創案した「日本」を日済間で使うことはありえたとも思う。

2

さて、この柵軍の第一回目遣使は、どのような目的をもって派遣されたものなのか。この遣使の前年(六六三)八月は、白村江の敗戦の時である。この結果、百済は最終的に滅亡した。白村江の戦役は、唐にとっては数多くの戦役の一つであったし、我が国にとっては不覚の敗戦であった。倭国(ヤマト)軍は、多大な船団を組んで(倭船千艘と『三国史記』新羅本紀文武王十一年七月条にみえる)復興百済軍の居城(周留城、書紀は州柔城とある)に兵士、兵器、食糧等を送りこもうとしたが、白村江口で唐の水軍に阻止され、四〇〇艘が焼失してしまった。この失敗と復興百済軍のなかの豊璋と鬼室福信、道探らの確執・分裂もあって百済は最終的に滅亡した。しかし、この戦いで倭国は潰滅的な打撃をうけて再び立ちあがることができなくなったわけではない。この戦いは、唐と倭国との全面戦争ではなく、しかも半島における戦争である。新羅方面に派遣されたという二万七千の兵力の結果は史料的にはみえず、その兵力はほとんど無傷であったと思われる^{補①}。又、白村江の軍兵は西日本を中心とした動員であったから東国の兵力の潜在的エネルギーはあった。

そもそも天智朝期は、次の天武朝も含めて律令国家体制が形成確立していく時期であって、まさに国家の発展期にあたる時代である。国力的に

も潰滅して立ちあがれないという状態ではなかった。白村江の戦役が我が国にとって大きな打撃であったことは間違いないのであるが、一方この戦いによって倭国の存在感（脅威）は唐側に強く感じられたであろう。

我が国は伝統的に大国としての意識をもって半島にある百済・新羅そして高句麗を自己の支配下、影響化におこうとしてきた。『隋書』倭国伝にも新羅・百済は皆倭を以て大国と為すとある。『書紀』をみると、朝鮮三国は朝貢国として扱われ、律令体制では、蕃国として隣国の唐とは区別されている。いわば我が国自身が中華意識をもって小帝国主義²²の志向をもっていたことはよく知られている。地勢上、日本列島は西側（東シナ海）に向って一方的に開かれ、東側の太平洋は閉ざされた空間である。文明・文化は常に西側の中国、朝鮮半島から一方的に流入してきたし、又それを王権は執拗に求めてきた。そこに渡来人、帰化人としての重要な役割がある。大国意識は、ある意味では我が国が文明国家、文化国家として形成されていく上で必要な要件であったかもしれない。

一方、中国にとってその関心は北にあり、歴代王朝の難敵は常に北狄の国々（騎馬民族）であって、東夷の国である北方の高句麗が隋代以降、執拗に攻撃の相手とされたのも北狄と連動する動きをとり、またその位置にあったからである。隋王朝はこの高句麗遠征に失敗し、滅亡した。唐の時代に入って六四五年以後太宗の高句麗遠征も五度にわたって展開されたが、いづれも撃退されて失敗した。高宗の時代になって、百済を滅ぼすことで、百済と高句麗との関係を断ち、高句麗を打倒しようという戦略のもと、六六〇年七月百済を滅ぼした。そして、このあと六六一年七月（十二月）の唐の高句麗遠征は王都平壤を包囲する勢いを示したものの、結局、翌年二月に蛇水の戦いに敗れ撤退を余儀なくされた。

高句麗打倒は隋王朝以来の宿敵であったがどうしても成就できなかった。これに対して、白村江以後、わざわざ海をわたって倭国を占領するというような危険で多大なエネルギーを要する冒険は唐の戦略のなかにはなかったし、また必要性もメリットもなかったであろう。

問題なのは、高句麗と我が国が軍事同盟を結んでいたということに注意しなければならない。

山尾幸久は、ヤマト（倭国）の百済救援について、百済滅亡後（六六〇年七月）すぐ十月には百済遺臣から援軍と豊璋王の帰国要請があり、六六一年四月に再度それがなされたにもかかわらず、それに応えたのが六六一年九月（豊璋、軍五千余によって衛送）であるのはあまりにも遅すぎるとして、その理由は何かと問題点を指摘する。そして「百済復興戦争へのヤマトの介入は、高句麗が百済復興の支援を約束したことによる。ヤマトは唐に敵対することを長らく逡巡していたのであって、高句麗と連携するという国家間の同盟関係が成立した時、その軍事的実績への信頼が選択されたのである」とのべ、六六一年九月の時点で、百済復興の支援について、ヤマトと高句麗との間に盟約がなされたという²³。

我が国が高句麗を救援したことは『書紀』にみえている。

六六一年七月、蘇將軍らによる水陸二路からの高句麗城下にせまる記事、九月に中大兄による豊璋王の冊立と百済への五千余の軍兵で衛送する記事をのせたあと、十二月には高句麗からヤマト朝廷への言上（報告）があつて、極寒の中で唐軍の要塞を撃破したこと、唐兵があまりの寒さで

「膝を抱きて哭く」とある(斉明七年七月、天智天皇即位前紀)。そのあと是歳条に「日本の高麗を救ふ軍將軍、加巴利浜に泊まりて火を燃く」とある。さらに翌六六二年正月に百済の鬼室福信に「矢十萬隻、糸五百斤、綿一千斤、布一千端、韋一千張、稻種三千斛」の軍事支援があり、是月(三月)条に「唐人・新羅人、高麗を伐つ。高麗、救を國家に乞へり。仍りて、軍將を遣して、疏留城に扼らしむ。是に由りて、唐人、其の南堺を略むること得ず。新羅も其の西界を輸すことを獲ず」とある。この条の六六二年三月にかかるのは「是に由りて」以下の唐の撤退の所²⁴⁾である。さらに天智二(六六三)年五月条に「犬上君馳せて、兵事を高麗に告げて還る」とあって、唐・新羅連合に対して、百済・高句麗・倭との間の連携も密にしようとしていた。

これら『書記』にみえる高麗側の状況記事は、高句麗僧道顕の「日本世記」に依拠しているもので信憑性はある。

白村江の戦いは百済復興の挫折となつてしまつたが、唐にとつては高句麗征討という最大の課題はのこされてきた。高宗が高句麗征討を再び起すのは白村江以後の六六五年末の宰相泉蓋蘇文の死が契機となつていた。翌年長男の男生は唐に帰服し、六六八年八月、五〇万の唐軍と二〇万の新羅軍が平壤城を包囲し、九月、城は攻略され、宝蔵王は降伏した。

従つて、禰軍の派遣は、白村江の戦のあと、高句麗征討がまだ展開される前の小康状態にある時期であつた。唐は百済の地において熊津都督府²⁵⁾を通して、百済の羈縻支配を徹底させるため(まだ反乱状態は部分的にはつづいていた)劉仁願は扶余隆とともに再び熊津に來り、残つていた劉仁軌とともに旧百済領の経営にあつた。この時期注目したいのは、六六四年二月劉仁願の下で熊津都督扶余隆と新羅の金仁問(文武王金法敏の弟)・天存(伊滄、大臣)との間で会盟がなされたことである(『三国史記』新羅本紀、文武王四年二月条)。ただこの会盟は高宗の敕命をかわすもので新羅王自身の会盟ではなかつたから、翌年(六六五)八月に改めて就利山で唐劉仁願の下で新羅王法敏と扶余隆との会盟が行われた(『三国史記』文武王五年八月条)。

山尾幸久²⁶⁾は、第一回の郭務悰・禰軍らの來朝の任務は、扶余隆と金法敏との会盟の儀に倭国王の臣の参加を要求することであつたとしてゐるが、それは任務の一つとしてはありえたことかもしれないが、実際上は第二回目の唐の皇帝の使者としての劉徳高、そして禰軍・郭務悰の來朝が九月(七月対馬着・九月筑紫着)であつたとすると、八月の会盟の儀の参加は無理であつたし、もともとそれが使者の視野に入つていなかったことが判る。もつとも第一回目の派遣は私使とみなされ、中大兄への奏上もなされなかつたのであるから、そうした要請が外交交渉の場にもちだせなかつたことも事実である。しかし、第二回目の再派遣の事実(年月等)をみる限り、第二回目の派遣の目的が就利山での会盟への参加要請でなかつたことはいえる。

そもそも百済の扶余隆と新羅王との会盟は血をすすりあつての誓約で、両国の国境線を決めて標識の塚をたて永く境界とするものであつたから、当然百済の滅亡によつて百済領は新羅領になると考えていた新羅王としては消極的にならざるをえなかつた²⁷⁾。しかし、皇帝高宗の敕命によ

って冊封体制下にある新羅としては承知せざるをえなかったのである。したがって、こうした会盟にヤマト（倭国）が参加するといっても、それはあくまで副次的なもので両国の戦争終結に賛意を表するといふものであつたらう。

さて、百濟復興戦争の鎮定後、百濟鎮將の劉仁軌は六六四年十月に以下のような上表を皇帝に奏上している。

陛下若欲^レ殄^二滅高麗^一、不^レ可^レ棄^二百濟土地^一、余豊在^レ北、余勇在^レ南、百濟・高麗旧相党援、倭人雖^レ遠、亦相影響、若無^二兵馬^一、還^二一國^一（『旧唐書』八十四、劉仁軌伝）

ここでは高句麗を殄滅^{てくめつ}させるためには百濟に兵馬をおいて高句麗征討を準備せねばならない。現に白村江戦でやぶれた豊璋は北（高句麗）に逃げ、同じく余勇は南（倭国）に逃げている。この百濟と高句麗が結び、倭人が強い影響力をもっているもとは百濟の地を強兵国として確立しないといけないと進言している。

このため高宗は劉仁願を渡海させ、扶余隆を還したのである。余豊や余勇の存在は再び百濟の復活によつては百濟と高句麗の連携、そして再び倭国の介入を呼びおこす危険性を劉仁願は感じており、また百濟が対高句麗征討への拠点となると考えていたのである。現に百濟は滅亡したとはいえ、まだその残党（遲受信^{ちじゆしん}）が任存城^{にんぞん}に居て頑迷に降服しなかったし（『三国史記』文武王三年十月条、文武王十一年七月条）、翌年（六六四）三月でも百濟の残党が泗泚山城によつて反乱をおこしたが熊州都督府が出兵してこれを撃破したとある（『三国史記』文武王四年三月条）。

従つて、郭務棕・禰（祢）軍らの派遣は、百濟占領を円滑に進めるためヤマトとの和親を求めたもの、あるいは戦争状態の終結と国交関係の修復、日本（ヤマト）の朝鮮半島への不干渉を約束させるためのものとする見解[※]でよいと思う。

第一回目の来朝は私使であるため入京をゆるされなかったものの『書紀』には中臣鎌足が沙門智祥を遣わして物を郭務棕に賜つたとあるが、その目的は我が子定恵をすみやかにヤマトに帰還させて欲しいというものであつたらう。定恵は白雉四（六五三）年五月に学問僧の一人として遣唐大使吉士長丹^{きしながに}の船にのつて唐へわたつたが、帰国したのは「定恵、以^二乙丑年^一、付^二劉德高等船^一」（『書紀』孝德天皇、白雉五年二月条の注）とあつて、乙丑年は天智四年（六六五）に当るから、二回目の劉徳向・郭務棕らの来朝の時であつた。定恵は在唐十二年、百濟より帰国しており、百濟の熊津都督府の力によるものではなかったか。定恵については複雑な事情もあるが[※]、それはここではふれない。この一件をみても、祢軍らの来朝は、和親・修好の外交交渉の枠内で理解できるものであつたらう。

禰軍らの第二回目の来朝は『書紀』天智天皇四(六六五)年にみえる。

九月庚午の朔にして壬辰に、唐国朝散大夫沂州司馬上柱国劉德高等を遣す。等といふは、右戎衛郎将上柱国百濟禰軍、朝散大夫郭務悰を謂ふ。凡て二百五十四人。七月二十八日に对馬に至り、九月二十日に筑紫に至る。二十二日、表函を進る。

冬十月己亥の朔にして己酉に大きに菟道に閱す。

十一月の己巳の朔にして辛巳に劉德高等に饗賜ふ。

十二月戊辰の朔にして辛亥に物を劉德高等に賜ふ。是月に劉德高等罷り帰りぬ。

是の歳に、小錦守君大石等を大唐に遣す云々。等といふは小山坂合部連石積・大乙吉士岐弥・吉士針間を謂ふ。蓋し唐使人を送れるか。

この二回目の遣使は唐の皇帝の御墨付の派遣で、劉德向に従う禰(祢)軍と郭務悰は前回と同じ人物であることは、この二回目も前回と同一線上の目的をもった遣使であったことがわかる。ただ遣使の人数が前回では祢軍が百余人、郭務悰が三〇人の人容であったから、今回は二百五十四人と約二倍近い人容になっていることが注目される、また对馬から筑紫(那ノ津)に到達するのに二ヶ月弱かかっているのは長い気がする。さらに菟道(宇治)では唐使の一行をむかえて大がかりな閱兵を行ったとあり、唐使に示威するための閱兵かとみられている。禰軍墓誌銘も参考にすれば、この遣使が威圧的な側面をもつての派遣であったとの印象を与える。

この二回目の遣使の目的に、翌年六六六年正月におこなわれた唐の高宗の泰山における封禪の儀への参列の要請があったとする見解³¹⁾があるが、それが守君大石の一行であったとすれば正月には無理であり、あるいは遅れての参列かとみる見方³²⁾もある。一方、劉仁軌に従って泰山に赴いたとされる倭衆³³⁾は、白村江戦において捕虜にされた倭衆とみる見解³⁴⁾もある。

この封禪の儀については、高宗が麟徳元(六六四)年七月に、三年正月を期して泰山で封禪の儀を挙行する旨を天下に告げ、諸王は二年十月に東都(洛陽)へ、諸州都督刺史は同年十二月に泰山に集まるように命じたという(『旧唐書』卷三十六、帝王部、封禪第二)。これによれば、泰山への集合は、十月皇帝に従って洛陽から泰山へむかった一行と、十二月に直接泰山に赴いた諸州都督刺史の一行があり、倭人・倭国は二つともあらわれている。

①前者については、「麟徳二年十月丁卯、帝發東都、赴東嶽(中略)突厥・于闐・波斯・天竺・罽賓・烏長・崑崙・倭国及新羅・百濟・

高麗等諸蕃酋長各率其属扈從」とある（『冊府元龜』三十六、帝王部、封禪第二）、②後者については、「麟徳二年、封泰山、仁軌領新羅及百濟・耽羅・倭国四国酋長、赴会。高宗甚悦、擢拜大司憲」（『旧唐書』卷八十四、劉仁軌伝）とあり、また『唐会要』（卷九十五、新羅）には「帶方州刺史、領新羅・百濟・耽羅・倭人四国使、浮海西還、以赴太山之下」とある。

両者の関係をどうみるか。前者は皇帝に従って十月に東都を出発して泰山に赴いた国々で、倭国は波斯・天竺・崑崙などと同列の国となっており、高句麗・百濟・新羅などの伝統的に冊封体制下にあった国々とは区別されている。いわば倭国は朝貢国となつて中国とは形式的には、主従関係にあった、もしくは友好関係をとつた国ではあるが、冊封体制下において朝貢をくりかえした朝鮮三国とは違つて、「不臣の朝貢国」であり、「絶海の国」であつた。後者の帶方州刺史劉仁軌は、任地から十二月までに直接泰山に赴いたもので、仁軌に率いられた倭人（倭衆）はすでにみたくように百濟にいた倭系百濟官僚・倭人系集団で、仁軌の主動で行われた麟徳二年八月の新羅王と扶余隆との会盟の場に耽羅とともに参列した倭人（倭衆）であつたと思われ。いわば鎮将・熊津都督府の配下にあつた倭人（倭衆）であつたろう。したがつて、前者の倭国の方が正式の参加であり、後者の方は劉仁軌の功績に利用された感じがする。しかし、熟考するに、十月皇帝に扈從して泰山に赴いた倭国の使人は、我が国から正式に派遣された使人とは思われない。おそらく白村江で捕虜にされた將軍クラスの人物が使人として仕立てあげられたものと考えられる。

というのは、封禪の儀の天下への布告は、麟徳元（六六四）年七月で、諸国は二年十月までに洛陽に来るやうにという命令であつたから、それが正式（手続きとして）に我が国に伝えられるためには、二回目の劉徳向、祢軍の来朝（六六五年七月）では無理があり、第一回目の六六四年五月の郭務儆・禰軍の来朝ではまだ皇帝の布告（七月）がなく、早すぎるので手続きをふんだ正式な要請はできなかった。又、第一回は百濟熊津都督府からの私使であつたから、そうした要請もなかつたと考えられる。中国にとっては、倭国は海上はるか彼方の絶海の国（辺境国）であつて冊封体制下にあつた周辺国の朝鮮三国とはその位置づけが違つたのである。中国が我が国を軍事的脅威と感じだすのは、まさしく白村江の戦いからであつたろう。

いづれにせよ、皇帝に扈從した倭国は、正式な使者でなく、捕虜などが使者として仕立てあげられたものであつたろう。

それならば、六六五年の守君大石の大唐への派遣は何を意味するものであろうか。この一行が唐に入ったことは天智六（六六七）年十一月になつて、副使坂合部石積らが熊津都督府の司馬法聰らによつて筑紫に送られてきたとあることによつても知られる（『書紀』天智天皇六月十一日条）。してみると、守君大石らの遣唐使は注にみるように十二月になつて唐使劉徳高ら一行を送つて唐の都に入ったことが考えられる。いわば泰山の封禪の儀に赴いた倭人・倭国の使人と遣唐使の守君大石ら一行は別個の存在であつたと考えられ、封禪の儀に赴いた倭人・倭国の使人は、百濟の熊津都督府との関係のなかで考えられるべきであらう。

それならば、第二回目の劉徳高・禰軍らの来朝の目的はなんで、守君大石らの遣唐使の意図はなんであつたのか。この点は『書紀』には明示さ

れていないが、かなり高度な外交交渉がなされたのではないかと思う。この点はこれに対応する祢軍墓誌銘の方からみておこう。

墓誌銘は、成功した二回目の来朝のことを記述したものであろう。第二回目は、祢軍は特に皇帝から選ばれた使者として二隻の軍艦を押したて『書紀』によると二五四名の多数で、いわば威圧的な軍事行動のごとき様子であった。対馬から筑紫(那ノ津)へ二ヶ月ほどかかっているのはそのためであろうか。

祢軍はヤマトに入ってから皇帝の権威の偉大なる点をのべ、日唐関係の利害得失をねばりよく説いて僭帝である倭王が皇帝の臣であることを承認させた。その結果、朝貢たる遣唐使を唐の都までおくつてきて、唐皇帝に拜謁させることに成功した。いわば朝貢による主従関係の確認である。

この時期の倭帝(天皇)は皇太子中大兄皇子で即位はしておらず、なかつすめみま中天皇みまたる地位にあった間人大后は二月に薨じている。『書紀』では中大兄は「称制」として、即位をのばして執政している地位にあったとしている。この中大兄が朝貢国として遣唐使を送るということは、形式的であれ従属的な皇帝の「臣」であることを認めることになる。具体的には、この時期の唐―熊津都督府の政治的課題は、高句麗への総攻撃であったから、高句麗とは軍事同盟関係にあった倭国(ヤマト)の介入を阻止することと、旧百濟領での安定的経営への協力は重要案件であった。つきつめれば、日唐間の友好関係の確認―従って、朝貢としての遣唐使の派遣であった。勿論、倭帝が「臣」を称したというのは祢軍側の言い分(受けとり方)であって、実際のところはもう少し複雑かもしれない。ヤマト側の立場にたてば、唐の高句麗総攻撃に対して黙認する、あるいは中立的立場をとるということであって、逆にいえば唐は倭国(ヤマト)を攻撃しないという言質をえていたのかもしれない。

祢軍墓誌銘にある「仍領^二大首望^一数^十人^一、将入朝謁」は、祢軍が先頭に立って守君大石ら大首望数十人を引率して唐の朝廷に入ったということであろう。守君大石は百濟救援軍の將軍の一人としてみえるので(但し、出兵はなかった、『書紀』天智天皇即位前紀八月条)「大首望」という呼称になったのであろう。

六六九年の河内直鯨の遣唐使が高句麗平定を祝賀したとある(『書紀』天智天皇八年是歲条、『新唐書』日本伝)のが事実であるならば祢軍らの一層の功績ということになったであろう。即ち、ヤマト(倭国)は六六八年の高句麗総攻撃に対しては、中立的立場をとり動かなかったということである。これによって、祢軍は「左戎衛郎将」(正五品上)を授かったということになる。

3 祢軍の新羅外交

このあと、「少進」^{（しほしん）}して、祢軍は「右領軍衛中郎将兼檢校熊津都督府司馬」となる。この官職はいつ頃のもののなのか。この場合、司馬とあるのが注意される。これは祢軍が対新羅工作をしたことと関連する。

高句麗滅亡（六六八年）後、唐と新羅は明確に対立するようになる。高句麗でも百濟滅亡時と同じく、反乱軍が唐に対する反攻を展開する。一方、新羅は安勝（元高句麗大臣淵浄土の子、もしくは高句麗宝藏王の嗣子^{（5）}）を高句麗王として漢城に迎い入れて唐と対立する。新羅は旧百濟を自己の領土にくみこむために百濟の多数の諸城を奪取し、熊津都督府の対立も決定的なものとなった。そうしたなか、熊津都督府の司馬禰（祢）軍は新羅に外交交渉のために派遣されたが、新羅文武王は禰軍をスパイとみて抑留し還さなかつた。

このことは、『三國史記』新羅本紀、文武王十（六七〇）年七月条に以下のようにみえる。

王、百濟殘衆の反覆を疑い、大阿滄儒敦^{（あさぐん）}を熊津都督府に遣わし、和を請う。従わず^{（都督府）}。乃ち司馬禰軍を遣わし窺覘^{（きてん）}す。王我を謀らんとするを知りて禰軍を止めて返さず。兵を挙げて百濟を討つ。

この百濟との戦いで六十三城を攻めおとし、住民を新羅の国内に移した。さらに七城を攻めて二千名を斬殺、十二城を攻めて北狄（唐軍に所属した靺鞨軍など）七千名を斬つた。そして、この時高句麗反乱軍の中心的存在であつた安勝を高句麗王としたのである。

この祢軍の派遣については、『三國史記』^{（6）}の別の所でもとりあげられている。それによると、咸亨元（六七〇）年六月に高句麗の反乱があつて、唐の官人が皆殺しにされるといふ事件があつた。新羅は高句麗の反乱軍を討伐するために熊津都督府に共同出兵をもちかけた。この計画を練るために司馬禰（祢）軍が新羅に派遣されてきた。禰軍は、共同出兵の誠実な履行のためにお互いに官人の人質交換を提案し、それが受け入れられたものの、結局、こじれてうまくいかず禰軍の抑留となるのである。

この熊津都督府との対立は、結局唐との戦いであつて、それが本格化する。

『三國史記』によると、六七年六月、新羅軍は唐軍と石城で戦い、斬首五千三百級、二人の百濟將軍と六人の唐の官人を捕虜にした。冬十月になると、新羅は唐の戦艦七十余艘を攻撃し郎將をはじめ士卒百余人を捕虜にしてその他溺れ死んだものは数えきれなかつた。このあと翌年（六七二）にかけては唐軍の反撃もあつて、唐との戦いは長期化することも予想されたため、新羅王は捕虜として留めていた唐の將軍や司馬禰軍ら士官百七十人を送り帰して、多大な貢物とともに上表して謝罪した（『三國史記』文武王十一年六月、十月、十二年九月条）。

こうしてみると、祢(禰)軍は熊津都督府の司馬として六七〇年七月に新羅に派遣され、長い年月(二年間すこし)抑留されて、六七二年九月に許されて帰還することができた。したがって、派遣された六七〇年七月の時点では司馬を冠していた。墓誌銘の「右領軍衛中郎将兼熊津都督府司馬」なる官職は、「左戎衛郎」を授けられた六六六年のあと、しばらく(少進)して六七〇年の頃任命されたものと推測したい。

さらに咸亨三(六七二)年十一月廿一日「詔授^(從三品)右威衛將軍」とあるのは、同年九月の祢軍の長年の抑留生活からの帰還にむくいる任官であつたらう。そしてこの官職名「右威衛將軍」が祢軍の称号の最後となるのである。

おわりに

以上、祢(禰)軍墓誌銘を『書紀』『三国史記』の彼の活躍を基軸としてよみとつてみた。祢軍は倭国と新羅との間で外交官として活躍したのであり、この墓誌銘には高句麗戦との関係はでてこない。

筆者は、「日本の余曠」の「日本」を百済に在る倭系集団(旧加耶地方の倭系集団も含む)や倭系百済官僚などの倭・倭人を寓意するものにとらえた。ただ前稿では、倭・倭国の別称であることを強調しすぎたのはゆきすぎであつて、一義的には「日本」も、「扶桑」も「風谷」も「盤桃」もみな中国側からみた海上はるか遠方にある神秘的な事物や現象をもつ地域を意味しており、それが具体的にどの地域、国を寓意しているかということである。祢軍墓誌を撰述した人物は唐人であろうが、その撰述の材料となったものがどのようなものであつたか、現在の筆者には力が及ばないので今後の検討課題である。

なお、ここに百済に在る倭人系集団・倭系百済官僚をもちだしたのは、白村江の時、百済王子扶余忠勝・忠志等に率られた「倭衆」を本国のヤマトから派遣されてきた軍兵とは別個の在百済の「倭系集団」とみただからである。そして、熊津就利山での新羅王と扶余隆との会盟に参列した倭人も在百済の倭人系集団・倭系百済官僚の人々であつて、熊津都督府の配下にあつたのであろう。もつとも「日本の余曠」をそうした「集団」に限定してしまうのは、あるいは問題があるかもしれないが、「日本」扶桑」という関係性は、「百済に在る『日本』の残党」と「本国」扶桑の国」という関係性としてよみとるべきであつて、そう考えると一義的には在百済の倭人系集団を念頭におくべきであらう。

最後に述べておきたいのは、本稿でも強調したように白村江戦の敗北は、決してこれによって我が国が潰滅的な打撃をうけて立ちあがれなくなつたのではなく、かえって白村江戦は唐にとって倭国の存在感を認識せしめることとなつた。とくにそれは、我が国が高句麗と軍事同盟をむすんでいたこともあつて、唐の宿願である高句麗征討にとって倭国はやはり大きな存在感をもっていたのである。また新羅と唐(熊津都督)との間がうまくいかなかったことも注意しなければならない。

新羅は六六〇年の百濟滅亡のあとは百濟領を新羅にくみこみ安定した戦後経営を目指したものの、唐は旧百濟を熊津都督府を通して強い覇権支配の下におき、百濟を新羅とは別個の「一國」として強化して、そこを拠点に宿願の高句麗打倒にそなえたのである。一方、新羅に対しては、唐は六六三年四月に鶏林都督府（鶏林は新羅の異称）とし、王を鶏林州大都督として覇権支配の一州（『三国史記』新羅本紀、文武王三年四月条）とした。白村江の戦いのすぐ前である。新羅としては、百濟を滅亡させたものの、百濟と同じ一州として二つの国が併存・対立するという事態を憂慮し、やがて新羅は百濟に併呑されてしまうのではないかとこの危機感を抱いた（『三国史記』文武王十一年七月条の王の書簡）。すでに鬼頭清明の指摘⁹⁷があるように、新羅と唐・熊津都督府との間のギクシヤクは、白村江戦の直前から始まっていたのであって、それが高句麗滅亡後の六七〇年頃からは唐と新羅とは全面対決に入るのである。（二〇一六年四月二四日、記）

注記

- ① 小林敏男「祢軍墓誌銘の『日本』と白村江戦前後」（『大東文化大学紀要』五十四号、二〇一六年三月）。
- ② 古代東アジア史ゼミナール「祢軍墓誌訳注」（『史滴』三四号、二〇一二年）。
- ③ 東野治之「百濟人祢軍墓誌の『日本』」（『図書』二〇一二年二月号、岩波書店）。
- ④ 葛継勇「『祢軍墓誌銘』についての覚書―附録・唐代百濟人関連石刻の釈文―」（専修大学社会知性開発センター『東アジア世界史研究センター年報』六号、二〇一二年三月）。同「国号『日本』とその周辺―『祢軍墓誌』の『日本』に寄せて（二）―」（『国史学』二〇九号、二〇一三年、国学院大学）。同「『風谷』と『盤桃』、『海左』と『瀛東』―祢軍墓誌の『日本』に寄せて（三）―」（『東洋学報』九五〇二、二〇一三年）。
- ⑤ 井上亘「禰軍墓誌『日本』考」（『東洋学報』九五〇四、二〇一四年三月）。
- ⑥ 王連龍「百濟人『祢軍墓誌』考論」（『社会科学戦線』二〇一一年、第七期）。
- ⑦ 東野治之、前掲③。
- ⑧ 小林敏男『日本国号の歴史』二〇一〇年、吉川弘文館）。
- ⑨ 東野治之、前掲③。
- ⑩ 気賀沢保規「百濟人祢氏墓誌の全容とその意義・課題」（二〇一二年二月二十五日、明治大学での国際シンポジウムにおけるレジュメ）。
- ⑪ 鈴木靖民「百濟救援の役後の日唐交渉」（『日本の古代国家形成と東アジア』二〇一一年、吉川弘文館。一九七二年初出）。
- ⑫ 井上亘、前掲⑤。
- ⑬ 岩波古典文学大系『日本書紀下』齊明天皇七年五月条の頭注、一九九三年。

- ⑭ 葛継勇「祢軍の倭国出使と高宗の泰山封禪―祢軍墓誌の『日本』に寄せて―」(『日本歴史』七九〇号、二〇一四年三月号)。
- ⑮ 田中健夫編『善隣国宝記』集英社、一九九五年。
- ⑯ 倉住靖彦『古代の大宰府』一一三頁、一九八五年、吉川弘文館。
- ⑰ 坂本太郎、平野邦雄監修『日本古代氏族人名辞典』一九九〇年、吉川弘文館。
- ⑱ 日本古典文学大系『日本書紀下』頭注、日本古典文学全集『日本書紀3』小学館、一九九八年。
- ⑲ 倉住靖彦『古代の大宰府』(別掲⑯)。この筑紫都督府については、(1)造作説、(2)実体をみとめる説、(3)唐の占領機関説がある。
- ⑳ 小林恵子『白村江の戦いと壬申の乱』一四五頁、現代思潮社、一九九〇年、一九八七年初版。但し、小林恵子は、大海人皇子と中大兄を兄弟ではないとみて、両者の対立を基軸として当時の国内情勢を理解しようとしている点については賛成できない。
- ㉑ 小林敏男「大兄制と輔政」(『古代女帝の時代』一章、一九八七年、校倉書房)。
- ㉒ 石母田正「天皇と諸蕃」(『日本古代国家論第一部』Ⅶ章、一九七三年、岩波書店)。
- ㉓ 山尾幸久『古代の日朝関係』四一六～七頁、一九八九年、塙書房。
- ㉔ 山尾幸久、四一四頁、前掲⑳。
- ㉕ 六六〇年当初は、百済は熊津以下五都督府がおかれたが、麟徳年間(六六四～五年)に熊津都督以外は廃止された。井上秀雄『古代朝鮮』二〇〇四年、講談社学術文庫、初出一九七二年を参照。
- ㉖ 山尾幸久、前掲書四二六頁(前掲㉓)。
- ㉗ 『三国史記』新羅本紀、文武王十一年七月条には、先王(武烈王)が貞観二二(六四八)年に入朝した時に、太宗皇帝から百済・高句麗二国を平定した折は、平壤以南の地と百済の土地すべて新羅王に与えるとの約束があったと記している。
- ㉘ 池内宏「百済滅亡後の動乱及び唐・羅・日三国の関係」(『満鮮史研究』上世篇第二冊)一九六〇年、吉川弘文館。鈴木靖民前掲⑪。倉住靖彦、前掲⑯。
- ㉙ 直木孝次郎「定恵の渡海―飛鳥・白鳳期仏教の性格に関する一試論―」(『古代日本と朝鮮・中国』講談社学術文庫、一九八八年)。
- ㉚ 日本古典文学大系『日本書紀下』頭注、日本古典文学全集『日本書紀3』頭注。
- ㉛ 日本古典文学大系『日本書紀下』補注27―七。山尾幸久、前掲書四二七頁。
- ㉜ 葛継勇、前掲⑭。
- ㉝ 池内宏、前掲⑳。

- ③4 小林敏男「中天皇について」（『古代女帝の時代』Ⅶ章、前掲②）。
- ③5 井上秀雄訳注『三國史記Ⅰ』東洋文庫、平凡社、一九八〇年。
- ③6 『三國史記』文武王十一年七月条に新羅王金法敏が唐の行軍総管薛仁貴（せうじんき）の信書に対して返書したところのべられている。
- ③7 鬼頭清明「新羅統一国家の成立」（『日本古代国家の形成と東アジア』第二章五節、一九七六年、校倉書房）。
- 補① この二万七千の新羅進行軍は、白村江に突入した廬原君臣らの率いる健児万余の軍勢とは別のものである。二万七千の軍勢の新羅での戦いは史料にもみえず、不明な点が多い。また新羅と唐は白村江戦の直前からギクシヤクした関係にあり、新羅側は唐と積極的に組んで戦う意志は小さかったと思われる。以上は今後の課題である。

※付記 本稿は二〇一六年四月成稿の論文であるが、事情があつて発表はおくられた。

（二〇一八年九月二十七日受理）